



あやし小話集

dousojin

ご挨拶

この度はこの本を開いていただきありがとうございます。

読み終わった後に背筋がちょ～っとぞくりとしてみたり、不思議だと首を傾げたり、あるいは「なんじゃこりゃ？」と言って頂けたら幸いです。

電話って呼び出し音が鳴った瞬間に静物から生物になるような気がしませんか？
というコンセプトで書きました。

「三日夜・・・」 私が見た夢をアレンジしました。

電話が鳴る

真夜中・・・真っ暗なアパートの一室で電話が鳴った。 リーン、リーン、今時の優しいメロディではなく昔ながらの呼び出し音だった。

男はベッドの中でその音を聞いた。

「なんだよお、今頃。」

男は薄っすらと目を開けて唸るように言うとそのまま頭まですっぽりと布団を被った。 自分はとても疲れているのだ、こんな真夜中、他人の睡眠の妨げになるような非常識な電話になど出たくはなかった。

電話はいつまでも鳴っている。けたたましく耳障りな音が部屋中に響き渡った。

「・・・ったく、誰だか知らないけどしつっこいってんだよ！」

鳴り止まないそれに男は布団の中で舌打ちと共に言った。 けれど布団をでようという気はなかった、面倒くさいのは勿論だが今更出るのはなんとなく相手に負けたようで気に入らなかったからだ。

「こうなりゃ根くらべだ。」

そんな事を言う男からはもう眠気はなく、ただ意地があるだけだった・・・。 いつまでも続く電話の呼び出し音、意地でも出てやるもんかと布団に潜る男、アパートの一室で奇妙な戦いが始まった、どちらも一歩も引かない熱戦だった。

・・・・・・・・と。

どのくらいたった頃か、すっぽりと覆った布団越しにもあれだけけたたましく響いていた呼び出し音がパタリと止んだ。

男はしばらくそのままいて、やがて布団から頭を出した。真っ暗な部屋の中、辺りをどことなく窺った、聞こえない、何も。

「誰か知らないがや〜っと諦めやがったか。」

男はニヤリと口許を歪め言うと身を起こし自身の勝利を宣言するかのようにつとつ大きな伸びをした。

「これでゆっくり眠れるぜ。」

電話があるはずの場所に向かって捨て台詞のように言って再び身を横たえた。手がずれた掛け布団を引き寄せる、瞳は自然に閉じられて、・・・その数分後には男は何事もなかったように寝入っていた。

.....

朝・・・・カーテンの隙間から入り込む日の光が顔を照らし、男は夜明けを知った。

のっそりとベッドから出るといつものようにバス・ルームへと向った。単身者には丁度いいユニットバス・・用を足して洗面台へと向き直った。

「！」

そこで男は声にならない叫びを上げた。なんと鏡に映っている自分の顔からあるべきはずのものがなくなっていたのだ。

あるべきはずのもの、それは・・・耳だった、両方の耳がまるで切り取られたかのようにすっぽりとなくなっている。

一体どうしたというのか？これは夢なのか？それとも・・・・男は驚愕のままバス・ルームを飛び出した。と、

電話が視界の隅に入った。それはまるでその場から飛び上がらんばかりに揺れている。男は理解した、昨夜、やかましく聞こえていた呼び出し音が途絶えたのは向うが諦めたのではなくて・・・・・・・・。

「一体どこのどいつだ！」

その瞬間、男は受話器を取り上げて叫んでいた。

・・・・・・返事はなかった。いや、あるいはあったのかもしれないが 男には何も聞こえなかった。

了

電話が鳴る 2

闇の中で電話が鳴った。 リーン、リーン・・・今時の優しいメロディではなく昔ながらの呼び出し音だった。誰も受話器を取らない、電話は鳴り続けている。 リーン、リーン、リーン・・・家中に響き渡るようなその音はまるで電話自身の苛立ちのようだった。

『早く出ろ！』 『いったい何をしているんだ！』

そんな言葉を叫んでいるように思えた。

けれど。

電話がどれほど大きな音を響かせようとこの家には受話器を取るものは存在していなかった。

破れた障子、ささくれ立った畳、色あせた襖、それにあちこちに堆く積もる埃・・・それらはこの家から人間がいなくなって長い時間が経っているという事を如実に物語っていた。

・・・ここは廃屋。

リーン。リーン。リーン。電話はいつまでも苛立ったような音で鳴り続けている、人間の不在など関係ないともいうように。

電話が鳴る

リーン！リーン！リーン！

音は更に激しさを増した。その激しさに電話に積もっていた埃が闇に舞い上がった。それでも鳴り続けていた。

やがて。

闇の中でパチリ！と音がして・・・その場に小さな明りを灯した。

小さな明り、それは火の玉、ぽろりと転がり落ちて玉は大きくなった。

ささくれ立った畳、色あせた襖、障子・・・大きくなった玉はそれらをゆっくりと取り込んでいった。

誰も住まなくなった廃屋が燃えている。夜の闇に立ち昇るのは紅蓮の炎、電話はその中でいつまでも鳴り続けていた・・・。

了

電話が鳴る 3

真夜中・・・アパートの一室で電話が鳴った。 リーン、リーン、今時の優しいメロディではなく昔ながらの呼び出し音だった。

電話はリビングのロー・テーブルの上、女は飛びつくようにして受話器を取った。 その電話が鳴るのを今か今かと待っていたのだ。

「ごめんなさい！私が悪かったの・・・」

相手を確認めようともせずにもせずに叫んだ。 呂律の回っていない声、彼女はしたたかに酔っていた。 今夕、些細な事で恋人と喧嘩別れして帰宅して。 それからずっとアルコールに浸っていたのだ。

はじめはただ怒りだけが感情を支配していた。 けれどその怒りが過分のアルコールにおさまってみれば、もう後には後悔と寂しさしか残ってなくて。 何かに憑かれたように電話をかけたけれど聞こえるのは無情なコール音だけだった。

だから。

「あなたはなにも悪くない、みんな私のわがままのせいなの！」

女は返事の返ってこない受話器に向かって続けた。

「いつもいつも・・・私のわがままであなただけを困らせて・・・あなたが怒るもの当然なのよ！」

自分が悪いのだと。 女は訴えるように言うけれど、受話器の向うからはなんの返事もなかった。

「お願い、何か言って！罵倒の言葉でもいい！あなたの声が聞きたいの！」

叫び続ける女の頬は涙で濡れていた。

「お願いよ！何か言って！お願いだから・・・」

女はそのまま泣き崩れた。 側に置いていたグラスが落ちて中身が零れたけれど、女にはそんな事は気にもならなかった。 ただただ相手の声が聞きたくて。 それだけを訴え続けた。

「・・・え？」

それがどのくらい続いたろうか、後悔と悲しみで醜く歪んでいた女の顔が一瞬の驚きに染まったかと思うと次にはこれ以上はないだろうと思われる程明るく輝いた。 受話器から待ち望んだ声がしたのだ。

「・・・あなた！」

待ち望んだ声はそれ程に女を喜ばせたのか、受話器をしっかりと耳に当てた女の頬を今度は喜びの涙が伝って行く頬が伝って行く。

「・・・ええ、ええ！あなたが望むなら何処へだってついて行くわ！本当よ！今すぐにだって構わない！」

女はほんの数分前とはうってかわった明るい声で答えた。

その瞬間！

ガタン！と大きな音がして・・・受話器が床に転がった、女の姿はもうその場にはなかった。

・・・

カーテンの隙間から朝陽が差し込む頃、可愛いピンクのカバーが掛かった電話が優しいメロディを奏でた。

『・・・昨日は一方的に怒鳴りつけてしまってゴメン。』

機械的な女の声が答えた後にカチリと録音用のテープが回る音がして、それに男の声が続いた。

『あの・・・今日会ってくれないか？今更謝っても許してはくれないだろうけど・・・このまま終わりにはしたくないんだ。』

頼むよと。 後悔と懇願の混ざった声が響くけれど部屋の中にはそれを聞く者はもう存在していなかった。

『午後7時にいつもの喫茶店で・・・来てくれるまで待ってるから。』

言葉が終わると同時にテープがカチリと音を立てて止まった。

．．．．後には静けさだけが残った。

了

電話が鳴る 4

電話が鳴った。

リーン、リーン、

今時の優しいメロディではなく昔ながらの呼び出し音、それが駅前交差点の脇にある電話ボックスの中で鳴った。

リーン、リーン。

ボックスの中とはいえ結構な音量、確実に外にも届いているはずだ。そもそも電話を“かける”ために存在する電話、それが呼び出し音を奏でるといのはとてつもなく珍しい事。

だのに。

誰ひとりとしてその音に注意を向ける者はいなかった。

通勤通学の足として利用されている駅の事人の往来も多く、今も電話ボックスの直ぐ前を幾人も通っている。

それなのに誰も音を気を止めない、どころかそんな音が鳴っている事さえ、更にはそこに電話ボックスがある事さえ知らないかのように通り過ぎて行く。

リーン、リーン。

電話が鳴る。

リーン、リーン

音は次第に大きくなる。

リーン、リーン、リーン

更に大きく、強く。

リーン！リーン！リーン！

それは今にも電話ボックスそのものを揺り動かしてしまうのではないかというような大音量へとなってゆく。

リーン！リーン！リーン！

大音量で電話が鳴る。

リーン！リーン！リーン！リーン！

電話ボックスの外でもはっきりと聞こえる音量で鳴っている。けれどやはり誰もそれを気に止めない、聞こえないはずはないのに。

リーン！リーン！リーン！リ・・・

どのくらいそれが続いただろうか、不意に音が止まった。と同時に電話ボックスそのものが煙のように消えた。

今の今までその場所にあった身の丈以上の電話ボックスが、それらしい四角い跡を土の上に残して忽然と消えてしまった。

それはまるで自身の存在が無用であると悟ったかのような消え方だった。

その日を境にあちこちにあった電話ボックスが次々と姿を消した、呼び出し音を奏でる事もなく静かに、静かに・・・

それに気付く者は勿論、誰もいなかった。

了

三日夜の夢

第一夜

おかしな夢を見た。

太陽が照り付ける砂漠にただ一人取り残されている夢・・・歩けど歩けど目に映るのは乾いた砂だけ。

耳に聞こえるのは切れ切れの吐息と照る太陽が肌を焼く音だけ。

どうして自分がこんな所に一人取り残されているのか、 どうしていつまでたってもオアシスは見えてこないのか、

どうして・・・暑い、苦しい、喉が焼ける、めまいがする、身体中に残った僅かの水分が今にも蒸発しきってしまうようだ。もうだめかもしれない・・・そう思った時に目が覚めた。

第二夜

おかしな夢を見た。

雨が降りつづける湿地帯にただ一人取り残されている夢・・・雨を避けようと木陰に向おうとするけれど一歩が進まない、降りつづける雨に泥と化した地に足を取られて。

前へ前へ・・・気は急くけれど足は一步も前にはでない。

反対に次第次第と泥の中へ吸い込まれて行く。

足首、脛、膝、大腿・・・腰・・・ゆっくり、けれど確実に地中へと潜り込んで行く、助けを呼ぶ声は雨音に消されて。

それでも懸命に叫ぶ、けれど答えはない。ただ無情の雨が頭上から降りつづけるだけだった。もうだめかもしれない・・・そう思った時に目が覚めた。

第三夜

おかしな夢を見た。

誰もいない、何も無い場所にただ一人取り残されている夢・・・前を見ても後ろを見ても何も無い、右も左も何も無いただ一面白の世界、そんな場所にぽつんと立っている。

大声で人を呼んだ、けれどそれは声にはならなかった。その場を逃げようとする、けれど身体はぴくりとも動いてくれなかった。

どうすればいい？どうしたらいい？誰か！そう思った時、白の世界に小さな染みが生じた。ポツンとひとつ黒い染み、白い世界に生じたそれはゆっくりと広がってゆく。

足元からゆっくり、ゆっくり・・・そして身体を包み込んだ。

痛い！・・・全身に棘が刺さったような痛みが走った。チクチクチク・・・止まらない痛みには誰にも聞こえない悲鳴をあげた、痛みから逃げようと動かない身体を振った。この痛みは永遠に続くのか・・・そう思った時に目が覚めた。

・・・目が覚めた。

やっと悪夢から逃れたと汗を拭いた視線の先に向日葵があった、その身を黒いアブラムシで纏った哀れな姿だった。息をのんで視線を逸らす、そうしたら別の何かが視界に入ってきた、それは土が乾ききって枯れかけた朝顔と排水溝の中に落ちたサボテンだった。

三日夜の夢が告げるものをそれに知った・・・。

了

あやし小話集

<http://p.booklog.jp/book/57336>

著者 : dousojin

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/butuzou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57336>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57336>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ